

---

土地分類基本調査

---

富士山・山中湖  
秦野・小田原

---

5万分の1

国土調査

静岡県

1990

---

# 目 次

## 序 文

## 総 論

I 位置及び行政区画 .....	1
II 人 口 .....	2
III 図 幅 内 の 特 性 .....	4
IV 主要産業の概要 .....	12

## 各 論

I 地 形 分 類 図 .....	25
II 表 層 地 質 図 .....	38
III 土 壌 図 .....	40
IV 傾 斜 区 分 図 .....	46
V 水 系 ・ 谷 密 度 図 .....	47
VI 土 地 利 用 現 況 図 .....	48

# ま え が き

1. 本調査の事業主体は静岡県であり、国土庁土地局国土調査課の指導を得て実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 調査の実施、成果の作成機関及び関係担当者は以下のとおりである。

総合調整 企画編集	静岡県農地森林部	農地企画課長	梅原 仁
	農地企画課	主幹兼 国土調査係長	池田 利平
	〃	副主任	渋谷 猛
	〃	主事	藤城 博幸
地形分類調査 傾斜区分調査 水系・谷密度調査 表層地質調査	静岡英和女学院 短期大学	教授	北川 光雄
	〃	〃	〃
	静岡大学理学部	教授	土 隆 一
土 壤 調 査	〃	〃	黒田 直
	〃	助手	茨木 雅子
	静岡県農業試験場	化学部長	石田 隆
	〃	主任研究員	中島 二夫
	静岡県林業技術センター	研究主幹	縣 富美夫
	〃	技 師	森 充
	東京農工大学農学部	教 授	浜田 竜之介
土 地 利 用 現 況 調 査	静岡大学農学部	名誉教授	加藤 芳朗
	静岡県農地森林部 林政課	主 任	白井 二十春
	静岡県農業試験場	化学部長	石田 隆
	〃	主任研究員	中島 二夫
協 力	静岡県東部農林事務所	係 長	猪熊 祐二郎
	〃 富士農林事務所	主 幹	高津 良平
※実施年度	調 査	昭和63年度	
	印 刷	平成元年度	

## 序 文

本県では、豊かな心と活力ある社会づくりを目標に各般の施策を積極的に推進することとしています。

この調査は、この施策を進めるうえで最も基本となる「地形」、「表層地質」、「土壌」、「土地利用現況」等の土地条件を体系的かつ総合的に把握するもので、その成果は、地域の特性に応じた土地利用計画、開発計画等を策定するうえでの基礎資料となるものであります。

本県においては昭和39年度からこの調査を実施しており、本年度は調査した昭和63年度に「富士山、山中湖、秦野、小田原」図幅について、その成果を取りまとめました。

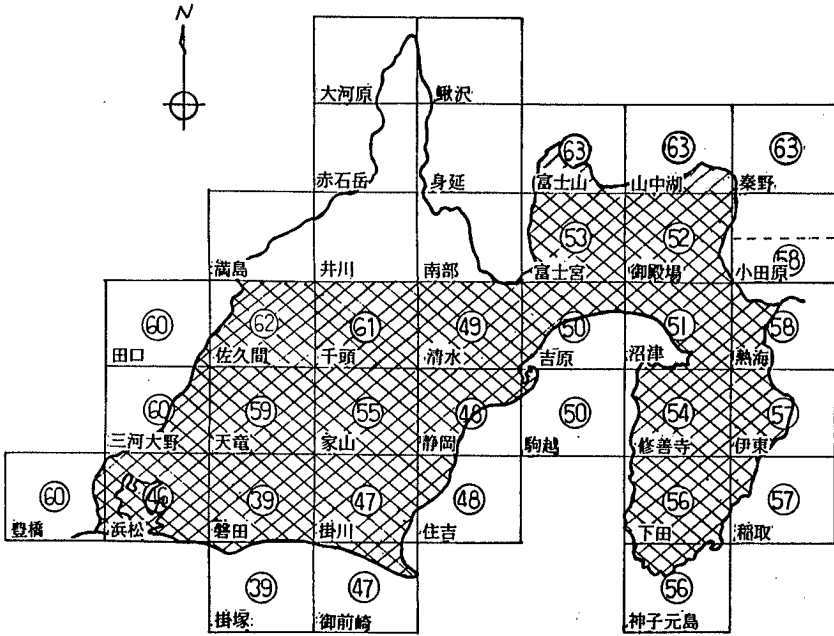
この成果が、行政上はもちろん広く県民の皆様に活用されることを願っております。

最後に、この調査の実施にあたって御協力頂きました関係各位に深く感謝を申し上げます。

平成2年2月

静岡県農地森林部長 佐野芳弘

# 位置図



# 総論

# I 位置及び行政区画

## 1. 位置

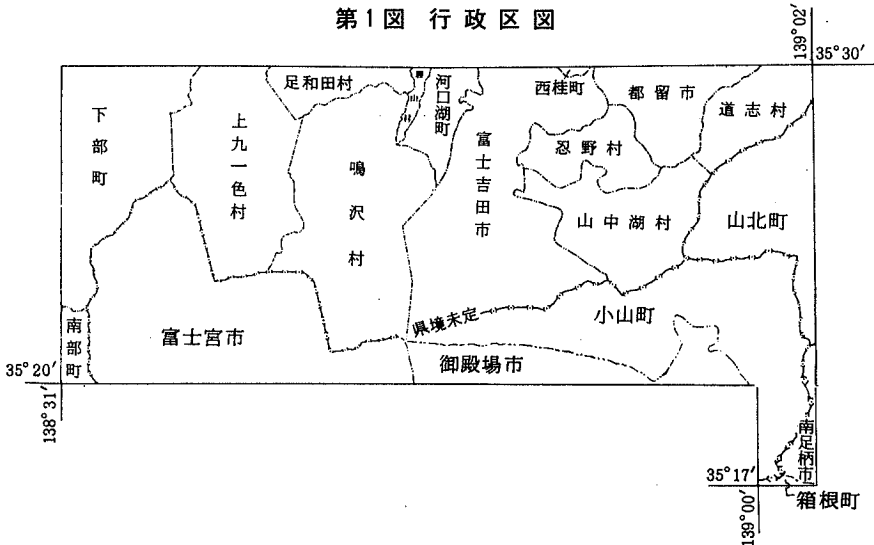
「富士山、山中湖、秦野、小田原」図幅は、静岡県東部・山間部に位置し、本図幅内中央部には富士山がそびえており、富士山からの溶岩流や土石流が図幅内の地質や地形に大きな影響を与えている。

また、範囲は東経  $138^{\circ}31' \sim 139^{\circ}02'$ 、北緯  $35^{\circ}17' \sim 35^{\circ}30'$  で、図幅内全面積は、約  $880 \text{ km}^2$ 、このうち静岡県の陸地面積は  $270 \text{ km}^2$  である。

## 2. 行政区画

「富士山、山中湖、秦野、小田原」図幅内の行政区は、第1図に示す静岡県富士宮市、御殿場市、駿東郡小山町、山梨県富士吉田市、都留市、南巨摩郡南部町、西八代郡下部町、上九一色村、南都留郡足和田村、鳴沢村、勝山村、河口湖町、西桂町、忍野村、山中湖村、道志村、神奈川県南足柄市、足柄上郡山北町、足柄下郡箱根町の5市7町7村の19行政区である。

第1図 行政区図



## Ⅱ 人 口

### 1. 人口の動向

昭和60年10月1日現在で実施された国勢調査によると、本県の総人口は357万4692人であり、このうち本図幅に含まれる市町村の人口合計は21万801人である。

昭和45年からの人口推移をみると、県全体では15.7%の増加となっており、一方、本地域においてはそれを上回る24.6%の増加となっている。

これは本地域が、国道246号線や東名高速道路など交通の要所となっているため、近年企業進出も盛んということもあって人口増加が際立っている。

次に年齢別構成を昭和45年と60年について対比してみると、15才から29才までの少・青年年齢層は減少しているが、それ以外の年齢層では16%から77%の大幅な増加となっている。また県全体と比較してみても、0才～29才ではほぼ同様な減少傾向を示しているが、30才以上では県全体と同様な増加傾向を示している。特に本地域で注目する点は、30才～44才の働き盛りの年齢層の増加が目立っていることである。

このことから、本地域が、労働力の供給にも大いに役立っていることがわかる。

一方、世帯数については、昭和45年の38,842世帯から60年には57,464世帯と47.9%の増加を示し、ここにも大企業進出に伴う人口急増が顕著である。また一世帯当りの家族構成は、昭和45年の4.4人から60年には3.6人へと減少し、核家族化への傾向がみられる。



第1表 市町村別人口及び世帯数

区分		市町村名		富士宮市	御殿場市	小 山 町	計	備 考
		男	女	計 (A)	世 帯 数	男	女	計 (B)
昭和 55年	人 口	男	53,249	35,942	12,242	101,433		
		女	54,959	33,319	10,970	99,248		
		計 (A)	108,208	69,261	23,212	200,681		
	世 帯 数	29,021	18,015	6,182	53,218			
昭和 60年	人 口	男	55,364	38,778	12,091	106,233		
		女	57,278	36,104	11,186	104,568		
		計 (B)	112,642	74,882	23,277	210,801		
	世 帯 数	30,804	20,397	6,263	57,464			
比較 増 減	人 口	男	2,115	2,836	△ 151	4,800		
		女	2,319	2,785	216	5,320		
		計	4,434	5,621	65	10,120		
	世 帯 数	1,783	2,382	81	4,246			
人口伸び率 $\frac{B}{A}$			1.04	1.08	1.00	1.05		

資料：国勢調査（昭和60年10月1日現在）

第2表 年齢別

年度 区分	45 年				50 年		
	地域計	率	県 計	率	地域計	率	県 計
0～14才	42,742	25.3	765,233	24.8	48,130	25.7	825,424
15～29才	49,874	29.5	847,213	27.4	49,665	26.5	802,041
30～44才	38,720	22.9	714,966	23.1	43,210	23.1	773,533
45～59才	21,689	12.8	544,292	17.6	27,175	14.5	646,944
60才以上	16,108	9.5	218,191	7.1	19,190	10.2	260,857
合 計	169,133	100.0	3,089,895	100.0	187,370	100.0	3,308,799
世 帯 数	38,842		755,745		48,962		868,333
人口増減率	-		-		110.8		107.1
世帯増減率	-		-		126.1		114.9

資料：国勢調査（昭和60年10月1日現在）

### Ⅲ 図幅内の特性

#### 1. 地 勢

“富士山”“山中湖”“秦野”“小田原”の4図幅にふくまれる県域が調査範囲である。この地域には日本最高峰 3,776 m の富士山頂を中心に東西斜面をもつ富士火山地、箱根火山地、三国山地、天子山地などの非火山地がふくまれる。新しい火山体である成層火山の富士山は円錐形のコニーデ型火山の形態でしられるが、山頂から東西にはほぼ対称的な山腹斜面の側線もち、山麓には広い裾野をもつ孤峰である。山地周辺にみられる古富士泥流堆積物からなる丘陵や台地、新しい溶岩流におおわれる高原状の台地、火山灰や降下火砕物のあつく堆積する丘陵や台地、山麓の扇状地性堆積地など、富士とその周辺の地形、地質は多様である。

新しい火山であるために初期の谷が放射状にのびて斜面を開析し、雨裂、ガリー状に表面を刻み、連続性や水量は乏しい。山頂に近い部分は急傾斜の露岩地域となり、火山の解体が進行しているために層状構造が観察できる。大沢崩れは富士山を刻む谷の代表的な沢であり末端に扇状地を形成する。斜面の表層の構成物

## 人口の推移

率	55年				60年			
	地域計	率	県計	率	地域計	率	県計	率
24.9	50,435	25.1	832,816	24.1	49,665	23.6	795,418	22.2
24.2	45,511	22.7	708,801	20.6	43,734	20.7	695,557	19.5
23.4	48,360	24.1	843,220	24.5	51,629	24.5	864,704	24.2
19.6	33,731	16.8	749,185	21.7	38,502	18.3	851,492	23.8
7.9	22,644	11.3	312,782	9.1	27,271	12.9	367,521	10.3
100.0	200,681	100.0	3,446,804	100.0	210,801	100.0	3,574,692	100.0
	53,218		969,904		57,464		1,033,037	
	107.1		104.2		105.0		103.7	
	108.7		111.7		108.0		106.5	

質をみると、東斜面は降下火砕堆積物や御殿場周辺の扇状地性泥流堆積物となるか、西斜面は溶岩流が露出し、朝霧高原のような小起伏をもつ高原状の地形となる。また爆裂火口をもつ宝永火山、噴石丘をもつ峠塚の側火山など、斜面に変化を与える寄生火山もみられる。

三国山地、天子山地はそれぞれ新第三紀中新世の御坂層群、富士川層群からなり、富士山をとりまくように東西方向、南北方向に稜線ののびる配置をしている。斜面形、水系の発達、起伏量などから壮年期の山地の特色をもち、斜面崩壊による斜面の変化もみられるし、山麓には小扇状地や崖錐を形成する。図幅の東端にあらわれる箱根火山地は、箱根外輪山の斜面にあたり、金時山、足柄峠などもふくまれる。三国山地南麓から鮎沢川河谷にかけての緩傾斜地はあつい火山灰層におおわれる台地や丘陵で、古富士泥流堆積物、御殿場泥流堆積物などが基盤にみられる。

河川は芝川、潤井川水系が富士火山と天子山地との間を南流し、鮎沢川水系が富士火山と箱根火山との間を北東流する。芝川は溶岩流地を下刻した流路をとり、滝や遷急点も多く、河床には溶岩が露出する。水源は湧水に依存する割合が高い。鮎沢川ぞいには沖積低地、河岸段丘が小規模に発達し、段丘は高位の台地や段丘面に移行している。鮎沢川の流量も湧水に依存し、支流須川ぞいの湧水量は多い。富士火山を開析する谷は、大沢崩れの沢をのぞくと小規模な放射状谷となり、ガリー状の涸谷がおおい。湖としては西麓にせきとめによる田貫湖があり、その北方には小田貫湿原がみられる。

## 2. 気 候

気温や降水量などの気候要素は、高度による垂直的变化、場所による水平的変化をもとに地域差をあらわしてくる。図幅内には日本最高峰の富士山頂から、標高 300 m ほどの鮎沢川谷底までもふくまれるため高度差は大きいし、南北方向に対応する南北差も大きくなるし、地形的影響もうけて気候の局地的変化は大きい。

富士山頂の年平均気温は -6.5℃で、最高を示す 8 月の平均気温は 5.8℃(御殿場 23.0℃)、最低を示す 1 月の平均気温は -18.9℃ (御殿場 1.5℃) であり、年較差は 24.7℃ (御殿場 21.5℃) と大きい。なお富士山の最低気温の極値は -35.5℃ である。そして日平均気温 5℃未滿を冬、5℃～20℃の間を春と秋とすると、富士山頂は 9 月はじめから次の年の 7 月中旬までが冬、7 月中旬から 8 月下旬まで

総 - 2 - 2 表 富士山頂明度と気象要素との比較 (山崎誠)

月	1	2	3	4	5	6	7	8
平均 顕 明 度	4.2	4.4	3.6	3.4	2.9	2.6	3.0	3.0
S E～S の風の頻度%	29.5	36.6	45.0	60.3	65.6	62.5	71.5	68.9
湿 度%	60.6	58.8	61.5	67.4	69.6	76.4	78.7	73.4

第 8 表 富士山気候表 (1951～1980 年)

要素	月	単 位	1	2	3	4	5	6
気圧 (現地の値)		mb	625.9	627.0	630.1	637.3	640.3	642.6
平均 気 温		℃	-18.9	-18.1	-14.9	- 8.1	- 3.8	0.5
平均 風 速		m/s	1.90	1.84	1.78	1.54	1.31	1.21

春と秋がやってきて、夏はかけるという状態がある。そして日最高気温が0℃以下になる真冬日は221.5日に達する。降水量は降水が飛散して観測不能のため観測値はないが、雪日数は120.9日(1941～1970の平均)に達する。推定降水量から富士山体に供給される水の量は年間22億 $m^3$ といわれ、山麓の豊富な湧水源となる。降水量については山頂で年間30,000 $mm$ に達するという推定もあるが実態は不明である。高所であるために風は強く、年間をとおして西よりの風が卓越するが、年間平均風速14.7 $m$ /秒、最大風速が15 $m$ /秒をこえる強風日数は245日(1940～1970の平均)、最大瞬間風速91 $m$ /秒、最大風速の極値は72.5 $m$ /秒などの記録もある。また霧の発生も多く、富士山の顕明度を0～5に区分して観測された値(1961)から夏にその発生のおおいこともわかる。

富士宮市は南北に長く標高も北高南低で気温もそれにともなって変化する。年平均気温は市街地付近で推定13℃程度、北にゆくほどさがり御中道で5.2℃(1980～1985)建設大学校で10.9℃(1980～1985)となる。降水量も白糸で2,206 $mm$ であるが標高とともに増加し、御中道で2,573 $mm$ (1980～1985)ほどとなる。日照時間は朝霧高原の名のように霧の発生により減少し山岳気象の影響をうける。東側の御殿場市も年平均気温12.2℃で8月に20.2℃、1月に-2.5℃と年較差が小さく高原性の特色を示す。平均降水量も3,055 $mm$ と多く降水量100 $mm$ 以下は冬季2ヶ月である。また日照時間数は沿岸にくらべて少なく、小山町でもほぼ同様な値であるが、斜面をのぼり標高とともに寒冷になっており、雨量も増大し太郎坊ではかつて4,000 $mm$ ほどの年間降水量をもっていた。

9	10	11	12
3.0	3.7	4.8	4.7
62.0	42.2	38.4	29.6
74.2	69.3	66.0	62.0

7	8	9	10	11	12	年
646.8	648.3	646.5	643.1	638.4	631.2	638.1
4.8	5.8	2.6	- 3.3	- 9.3	-15.4	- 6.5
10.6	9.0	12.2	12.4	15.3	17.5	14.7

第3表 気 象

月別 区別	観測所	1月	2月	3月	4月	5月
平均気温	御殿場	1.5	2.1	5.4	10.7	15.3
	三島	4.6	5.5	8.6	13.8	18.2
最高気温	御殿場	6.5	6.7	9.8	15.3	19.8
	三島	10.1	10.4	13.4	18.6	22.8
最低気温	御殿場	- 2.9	- 2.1	1.2	6.3	11.1
	三島	- 0.5	0.6	3.8	8.9	13.4
降水量	御殿場	73.9	110.0	257.9	268.2	255.3
	三島	62.8	72.1	185.9	165.6	154.1
	白糸	48.3	64.3	177.2	184.0	213.4

資料：静岡地方気象台資料 統計期間（1979年～1987年の9年平均値）

第4表 産業分類別

分類 市町村	総数	第1次産業				第2次	
		農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業
県全体	1,839,532	149,616	3,580	10,958	164,154	1,548	150,575
富士宮市	55,145	3,568	146	93	3,807	84	5,095
御殿場市	40,117	2,147	51	3	2,201	38	2,346
小山町	12,815	657	27	8	692	17	847
地域計	108,077	6,372	224	104	6,700	139	8,288

資料：国勢調査（昭和60年10月1日現在）

表

 { 温度 °C  
 降水量 mm

6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	年平均
18.4	21.7	23.0	19.5	14.4	9.5	4.5	12.2
21.6	24.9	26.2	22.8	17.4	12.4	7.3	15.3
22.2	25.2	27.0	23.3	18.8	14.1	9.6	16.5
25.4	28.5	30.2	26.7	22.1	17.4	13.0	19.9
15.3	19.1	19.9	16.5	10.4	5.1	- 0.2	8.3
17.9	21.9	22.7	19.2	13.1	7.7	2.0	10.9
3417	2708	3638	2957	2411	1559	658	27000
2148	1888	2348	2091	1467	1097	549	17991
2421	1992	3063	2221	1761	1163	432	19928

## 就業者数

産 業		第 3 次 産 業				分 類 不 能	構 成 比		
製造業	計	卸 売 小 売 業	サービ ス 業	その他	計		第 1 次 産 業	第 2 次 産 業	第 3 次 産 業
589,136	741,259	382,189	339,544	210,594	932,327	1,792	8.9	40.3	50.7
19,901	25,080	10,795	9,747	5,693	26,235	-	6.9	45.5	47.6
12,056	14,440	6,355	8,469	8,630	23,454	-	5.5	36.0	58.5
4,035	4,899	1,467	3,055	2,700	7,222	-	5.4	38.2	56.4
35,992	44,419	18,617	21,271	17,023	56,911	-	6.2	41.1	52.7

### 3. 就業構造

本地域の昭和60年10月1日現在における産業別就業人口の比率は、第1次産業6.2%（県全体8.9%）、第2次産業41.1%（同40.3%）、第3次産業52.7%（同50.7%）であり、第2、第3次産業の占める割合が大きいことがわかる。これは県平均の就業構造に大変近い構成割合となっている。

また、昭和55年と比較してみると、第1次産業が1.2%（県全体1.7%）、第3次産業が0.7%（県全体では逆に0.8%の上昇となっている）低下し、第2次産業は1.9%（同0.8%）上昇している。

一方、昭和60年における分類別の就業者数の比率をみると、1位製造業（33.3%）2位サービス業（19.7%）、3位卸売・小売業（17.2%）の順となっており、これを昭和55年と比較すると、1位の製造業は変わらないものの、卸売・小売業は2位から3位へと後退し、サービス業が3位から2位に上昇した。

次に、市町村別にみると、御殿場市、小山町では第3次産業が約56～58%を占めているが、富士宮市では第2次産業と第3次産業がほぼ同様な40数パーセントの割合となっている。

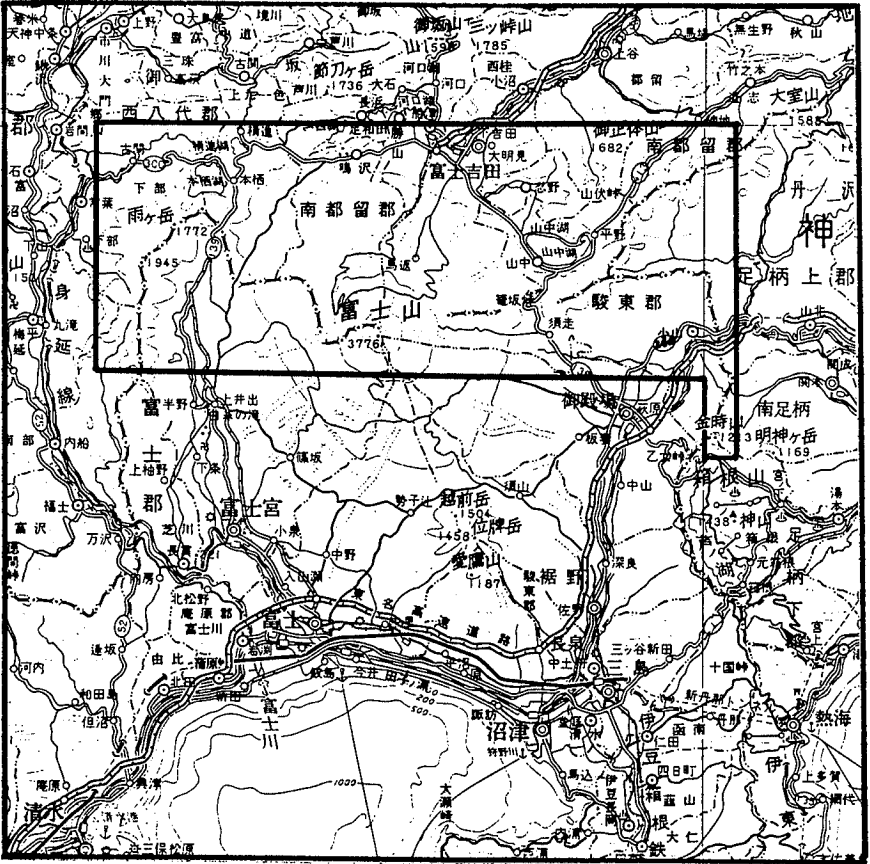
また、第1次産業のウェイトが5%程度と、富士宮市のそれを下まわっており、富士宮市とは異なった分類となっている。分類別では、3市町村とも、製造業が1位となっている。

### 4. 交 通

交通網の整備は、地域の繁栄と住民の日常生活を豊かにするうえで重要なことである。本図幅内の交通網は、図幅内西部の富士市から富士宮市を經由して、富士五湖に通じている国道139号線と、バイパス道の国道139号線（通称、富士宮有料道路）、身延及び下部温泉を經由し本栖湖に抜ける国道300号線があり夏季の観光シーズンには混雑する。次に図幅内東部の沼津市から御殿場市を經由し首都圏に通じている国道246号線、富士山の東側を通り、富士五湖に通じる国道138号線がある。また、富士山南側を東西に横断する富士山スカイライン、他に富士スバルライン等の登山関係ルートがある。



第2図 交通網図



## IV 主要産業の概要

### 1. 農 林 業

本地域の農業形態をみると、昭和55年の農業就業人口は7,052人であったが、昭和60年には6,372人となり、10.6%減少した。農家戸数は5年間で376戸（4.5%）減少している。また、専業農家戸数については600戸で、55年比0.7%（4戸）の増加となっており、県平均の10.7%の減少率と比較してみると小幅な伸びとなっている。次に、第1種兼業農家戸数及び第2種兼業農家戸数はそれぞれ7.4%（68戸）、4.6%（312戸）減少している。また、第2種兼業農家についても、4.5%の減少となっている。地域に占める第2種兼業農家の割合は81.7%と昭和55年調査と全んど変化はない。しかし、県平均の68%と比較してもかなり高い数値を示しており、兼業化が顕著に現れている。

一方、経営耕地面積は、第5表のとおり1戸当り0.32haで県平均0.59haと比較すると半分程度となっている。

農業生産についてみると、本地域では米の生産も多いが、その他、畜産もかなり盛んである。市町村別にみると、御殿場市、小山町では米の粗生産額が全体の32.5%～55.0%と $\frac{1}{3}$ から半分以上を占めており、重要な産物となっている。また、

第5表 専 業 兼 業

区 分	総 農 家 数			専 業 農 家			第1種兼業	
	昭 和 55 年	昭 和 60 年	対 55 年 比	昭 和 55 年	昭 和 60 年	対 55. 年 比	昭 和 55 年	昭 和 60 年
静 岡 県	132,037	124,007	93.9	16,665	14,885	89.3	30,154	24,842
富士宮市	4,191	3,923	93.6	466	441	94.6	609	589
御殿場市	3,095	3,007	97.2	100	119	119.0	253	220
小 山 町	1,012	992	98.0	30	40	133.3	53	38
地 域 計	8,298	7,922	95.5	596	600	100.7	915	847
構 成 比	100.0	100.0		7.2	7.6		11.0	10.7

資料：農業センサス（昭和60年2月1日現在）

富士宮市では畜産が盛んで市全体の 68.4 % の生産額を占めている。

次に、粗生産額は、昭和57年の 189 億8,500万円から昭和62年には 166 億2,100万円と 5 年間で 12.5 % の大幅な減少となっている。農家一戸当りの生産額は2,098千円で、県平均2,541千円と比較すると 83 % 程度と低く、特に東部の御殿場市、小山町においてはそれぞれ、1,783千円、1,104千円と県平均の 70.2 % と 43.4 % に過ぎない。一方、富士宮市は、3,228千円と県平均の 127 % と大きく上まわっている。このことから、富士宮市は畜産生産の占めるウエイトが高く、中でも、乳用牛、養鶏等による土地生産性が高い集約農業が進んでいる。また、御殿場市及び小山町は稲作中心の農業で耕地面積も狭く粗生産額が低い。

作物別生産額の割合は、「乳用牛」が 22.8 % で第 1 位、「養鶏」が 21.4 % で第 2 位、「稲作」が 16.9 % で第 3 位となっており、本地域の特色がよく現われていると言える。

## 別 農 家 数

：戸

農家	第2種兼業農家			経営耕地面積 (h a)					
	対 55 年 比	昭 和 55 年	昭 和 60 年	対 55 年 比	田	普通畑	果樹園	茶 園	1戸当り
	82.4	85,218	84,280	98.9	0.34	0.13	0.38	0.34	0.59
	96.7	3,116	2,893	92.8	0.29	0.22	0.12	0.26	0.66
	87.0	2,742	2,668	97.3	0.51	0.14	0.09	0.05	0.60
	71.7	929	914	98.4	0.53	0.08	0.10	0.04	0.59
	92.6	6,787	6,475	95.4	0.43	0.16	0.11	0.11	0.32
		81.8	81.7						

第6表 農用地面積及び

区 分	県 全 体		富 士 宮 市		御 殿 場 (h a)
	(h a)	構成比	(h a)	構成比	
1. 農用地面積	102,453	133	4,034	128	2,542
田	37,187	4.9	860	2.7	1,688
畑	65,266	8.4	3,174	10.1	854
2. 森林面積	505,497	65.0	20,405	65.0	12,535
民 有 林	409,031	52.6	13,411	42.7	8,498
国 有 林	96,466	12.4	6,994	22.3	4,037
宅地その他	169,377	21.7	6,983	22.2	4,782
行政面積	777,327	100.0	31,422	100.0	19,859

- 資料：1 行政面積は、建設省国土地理院「全国都道府県市町村別面積調」に  
 2 農用地及び宅地その他の面積は、県市町村課「固定資産に関する概  
 3 森林面積は、県林政課「静岡県林業統計要覧」による。（平成元年

## 森林面積の概要

市	小 山 町		地 域 計	
	(h a)	構成比	(h a)	構成比
128	944	7.0	7,520	11.6
8.5	592	4.4	3,140	4.8
4.3	352	2.6	4,380	6.8
63.1	9,369	69.8	42,309	65.4
42.8	6,272	46.7	28,181	43.6
20.3	3,097	23.1	14,128	21.8
24.1	3,108	23.2	14,873	23.0
100.0	13,421	100.0	64,702	100.0

よる。(昭和62年10月1日現在)

要調書」による。(昭和64年1月1日現在)

3月31日現在)

第7表 主要農業

区 分		県 全 体		富 士 宮 市		御 殿 場 (百万円)
		(百万円)	構成比	(百万円)	構成比	
農業粗生産額		315,057	100.0	12,664	100.0	5,360
耕 種	全 体	226,761	72.0	3,778	29.8	2,954
	米	32,526	10.3	880	6.9	1,740
	野 菜	76,668	24.3	1,676	13.2	413
	果 実	22,851	7.3	32	0.3	8
	工芸農作物	59,483	18.9	408	3.2	77
	そ の 他	35,233	11.2	782	6.2	716
畜 産	全 体	65,096	20.7	8,656	68.4	2,368
	肉 用 牛	10,038	3.2	772	6.1	181
	乳 用 牛	14,407	4.6	3,865	30.5	446
	豚	18,687	5.9	999	7.9	557
	鶏	19,730	6.3	2,927	23.1	1,152
	そ の 他	2,234	0.7	93	0.8	32
養 蚕 ・ 加 工 農 産 物		23,200	7.3	230	1.8	38

資料：「静岡県農林水産統計年報」による。（計算期間 昭和62年1月1日か

## 粗生産額

市	小山町		地域計	
	(百万円)	構成比	(百万円)	構成比
	1095	100.0	19,119	100.0
100.0				
55.1	988	90.2	7,720	40.4
32.5	602	55.0	3,222	16.9
7.7	231	21.1	2,320	12.1
0.1	4	0.4	44	0.2
1.4	29	2.6	514	2.7
13.4	122	11.1	1,620	8.5
44.2	86	7.9	11,110	58.1
3.4	7	0.7	960	5.0
8.3	53	4.8	4,364	22.8
10.4	16	1.5	1,572	8.2
21.5	9	0.8	4,088	21.4
0.6	1	0.1	126	0.7
0.7	21	1.9	289	1.5

ら同年12月31日までの1年間)

## 2. 商 業

本地域の商業は、昭和63年6月1日現在商店数3,288店、従業員数14,592人、年間商品販売額3,186億1,900万円となっている。

このうち商店数についてみると、昭和60年と比較して4.1%の増加となっており、県全体の1.8%増と比較しても県の平均以上となっている。また、1店当りの売場面積は56㎡と県平均の48㎡を若干上まわっており、従業員数は4.4人と県平均の4.9人には及ばない。全体的に小規模店な店舗が多いと言える。

次に年間商品販売額を見ると、昭和60年に比較して8%の増加となっており、県平均伸び率11.9%を若干下まわっているとともに、1店当りの販売額についても3.8%増と、県平均の9.9%と比べても大きく水をあけられている。以上のこ

第8表 商 業 の

区分	商店数		従業員数		年間商品販売額	
	60年	63年	60年	63年	60年	63年
市町村	店	店	人	人	百万円	百万円
富士宮市	1,878	1,908	8,010	8,320	180,245	180,141
御殿場市	989	1,079	4,552	5,321	101,768	122,644
小山町	292	301	845	951	12,820	15,834
地域計	3,159	3,288	13,407	14,592	294,833	318,619
県計	63,955	65,091	292,541	321,025	11,059,754	12,374,961

資料：1 静岡県商業統計調査（昭和63年6月1日現在）

2 数量については飲食店を除く。



とから、本地域においては人口増加に伴って商業活動も活発化してきているといえるが、小規模店が比較的多い地域でもあるため、近年、店舗も複合化大規模化の傾向を見せてきている。

ただ問題としては、1 商店当りの年間販売額が県平均の 51.1 % の額にすぎず、従業員 1 人当りの年間販売額についても県平均の 56.7 % と半分程となっており、零細な小売店が多いのが特色といえる。

今後、本地域の商業の安定と成長を図るためには、多数を占めている零細な小売店を保護することが必要である。そのためには、商店街の再開発、店舗の複合化等を積極的に推進していかなければならないと思われる。

## 概 要

売 場 面 積		1 商店 当 り		従 業 員 1 人 当 り 年 間 販 売 額	備 考
60 年	63 年	従 業 員	年 間 販 売 額		
$m^2$	$m^2$	人	百万円	万円	
98,250	103,952	4.4	94	2,165	
59,915	70,380	4.9	114	2,305	
11,437	11,181	3.2	53	1,664	
169,602	185,513	4.4	97	2,184	
2,851,368	3,122,604	4.9	190	3,855	

### 3. 工 業

本地域の昭和63年12月31日現在における事業所数は1,194箇所、製造品出荷額は8,754億3,800万円で昭和58年に対して67箇所（5.9%）、従業員数は2,699人（10.3%）、製造品出荷額は3,046億3,700万円（53.4%）とそれぞれ増加している。中でも製造品出荷額は50%以上の大幅な伸びを示している。これを県平均と比較してみても、事業所数（県平均1.6%減）、従業者数（同5.3%増）、製造品出荷額（同28.8%増）のいずれをも上まわっており、工業の面においても急速に伸びつつある状況である。

また、1事業所当たり及び1従業員当りの出荷額についても、各々7億3,320万円、3,027万円と県平均の169.9%、117.3%となっており、これは各事業所で機械

第9表 事業所

区分	事業所数		従業者規模別			
	58年	63年	1～29人		30人以上	
			58年	63年	58年	63年
市町村						
富士宮市	か所 642	か所 703	か所 570	か所 618	か所 72	か所 85
御殿場市	364	372	315	316	49	56
小山町	121	119	99	94	22	25
地域計	1,127	1,194	984	1,028	143	166
県計	32,709	32,171	30,316	29,481	2,393	2,690

資料：静岡県工業統計調査（昭和63年12月31日現在）

注）：製造品出荷額については、従業者数4人以上の事業所の金額である。

化、能率化が進められ生産率が上がったものと思われる。しかし、経営規模についてみると、従業員数1～29人の占める割合が85.3%と県平均の64.6%を上まわっており小規模事業所が多いのが特色といえる。

次に、業種別の事業所数をみると、本地域においては、電機、精密機械、一般機械、金属製品等の産業機械部門が全体の半数近くを占めており、また軽工業は全体の21%と、県平均の17.6%を若干上まわっている。業種別の分類では全体的に県平均に近い値となっている。

## の 概 要

従 業 者 数		製 造 品 出 荷 額		摘 要
58 年	63 年	58 年	63 年	
人	人	百万円	百万円	
13,510	13,949	291,601	357,156	
8,370	10,489	200,070	406,584	
4,343	4,484	79,130	111,698	
26,223	28,922	570,801	875,438	
511,028	538,075	10,776,518	13,885,281	

第10表 産業別事業所数、製造品出荷額

区 分	富 士 宮 市		御 殿 場 市		
	事業所	出荷額	事業所	出荷額	
	か所		か所		
食 料 品	49	12,466	33	39,311	
織 維 ・ 衣 服	10	5,690	6	×	
木 材 ・ 木 製 品	26	1,690	17	1,808	
家 具 ・ 装 備 品	5	190	13	13,859	
紙 ・ 出 版 ・ 印 刷	76	67,832	14	27,487	
化 学 工 業	11	158,589	5	20,179	
プ ラ ス チ ッ ク 製 品	18	3,733	11	12,150	
ゴ ム 製 品	3	×	1	×	
な め し 皮 ・ 同 製 品	2	×	-	-	
窯 業 ・ 土 石	7	2,459	10	4,625	
非 鉄 金 属	10	719	7	44,699	
金 属 製 品	56	11,233	18	3,407	
一 般 機 械	84	39,936	20	60,384	
電 機 ・ 精 密 機 械	72	32,424	88	74,034	
輸 送 機 械	39	18,891	18	52,248	
そ の 他 の 工 業	9	797	14	48,147	
計	477	357,156	275	406,584	
構 成 比	地 域 計	56.8	40.8	32.7	46.4
	県 計	2.5	2.6	1.4	2.9

資料：静岡県工業統計調査（昭和63年12月31日現在）

注1）：×は秘匿のため出荷額の計と産業別の集計とは一致しない。

注2）：構成比のうち町村分は地域計に対するもの、地域計は県計に対する

の概要（従業員４人以上の事業所）

（単位：百万円）

小 山 町		地 域 計		県 計	
事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額
か所		か所		か所	
3	8,653	85	60,430	2,800	1,633,487
4	14,825	20	×	1,469	313,960
4	223	47	3,721	1,188	252,838
7	3,007	25	17,056	1,294	229,913
5	×	95	×	1,594	1,152,399
2	×	18	×	216	1,395,886
2	×	31	×	910	447,860
-	-	4	×	308	159,691
1	×	3	×	43	5,121
1	×	18	×	408	171,675
4	1,369	21	46,787	239	549,452
8	28,616	82	43,256	2,314	772,970
11	2,500	115	102,820	2,292	1,033,953
26	24,097	186	130,555	1,838	2,101,114
3	1,776	60	72,915	1,644	3,001,433
7	16,246	30	65,190	819	663,529
88	111,698	840	875,438	19,376	13,885,281
10.5	12.8	100.0	100.0		
0.4	0.8	4.3	6.3	100.0	100.0

もの。

# 各 論

# I 地形分類図

## 1. 地形の概要

今年度の調査地域は、“富士山”“山中湖”“秦野”“小田原”の4図幅にふくまれる静岡県内の範囲である。この地域は富士火山の東斜面、西斜面を中心に三国山地、天子山地などの非火山がその周辺をとりまくようにひろがり、山梨県と神奈川県との県境をなしている。また東端には箱根火山地の一部がふくまれ、神奈川県との県境をなしている。

三国山地、天子山地は新第三系よりなる山地であり、籠坂峠を中心に東西にのびる三国山地は大洞山、三国山などの山頂、明神峠、世附峠などの峠をもち、西方は富士火山体に漸移し、あつい火山灰層におおわれる。割石峠から南にのびる天子山地は毛無山地、天守山地ともよばれる。毛無山を中心とする山地と南方の長者ヶ岳を中心とする山地とでは構成物質がややことなるがほぼ南北方向の稜線をもち高度な毛無山の1945m、長者ヶ岳で1335mである。第三系の山地と富士火山体とは、西部では明瞭な境界をもって接する。山地の斜面形、谷の発達のように特色をもつが、東部では富士火山との間に丘陵、台地などの地形が発達する。

富士火山は山頂の噴火口を中心に東斜面と西斜面がふくまれるが新しい火山の斜面形態と水系をもち、傾斜も高度の低下とともに減じて広い裾野を展開させている。裾野の地形も東西は対照的で、西斜面は溶岩流が地表面の地形を規定し、末端の小崖部や小丘など地表形態は複雑であるが、東斜面は火山灰、火山砕屑物があつく堆積して地表をおおい、土地利用や開発の歴史にもその相違がみられる。地形面や構成物質のちがいは山麓地をくらべても、東部の御殿場泥流の形成した扇状地と西側の新しい大沢扇状地、東の水田地帯と西の酪農地帯など、水系の特性や湧水のありかたなどにもかかわり、コントラストが明らかである。

周辺には丘陵性の山地や台地も形成されるが、これは古富士泥流堆積物からなる丘陵、あつい火山灰層や新しい泥流堆積物からなる地域の開析や2次的堆積によって形成された台地など局地的な特性をもっている。主要な水系は西麓を南流する芝川水系、東麓と箱根火山地との間を北東流する鮎沢川水系があり、地形的な境界も形成している。火山の斜面に発達するガリー状の浸食谷も局地的な下刻をくりかえしている。山腹斜面の谷は降水時のみ流水のみられる潤谷がほとんど

であるが、芝川や鮎沢川は表流水や地下水の湧水を水源にして水量はめぐまれている。河川ぞいの低地や砂礫台地は小規模で発達は不十分であるが、鮎沢川ぞいの河成段丘には特色がある。また平地としては三国山地や天子山地山麓の小扇状地や崖錐が分布し、土石流的な堆積物によって形成されている場合もある。

山麓の緩斜面は水田、畑地、牧草地などの農業的土地利用が主であるが、演習場、ゴルフ場、レジャー施設、工業団地などの造成による改変もすすみ、土地利用形態は地形的条件に対応して多様であるし、今後も造成の進行する可能性は大きい。そのために改変にともなう防災的配慮や安全性の確保も要望される地域である。

## 2. 地形地域区分

4 図幅にふくまれる地域の地形を海拔高度、起伏量、水系・谷密度、傾斜区分、地形面の性質、構成物質、地域的なまとまりなどを基準にして次のような地形区の区分をおこなった。

- I 山地
  - I a 天子山地
  - I b 三国山地
- II 富士火山地
  - II a 富士火山地斜面
    - II a 1 露岩岩屑の急斜面
    - II a 2 火山地斜面
  - II b 富士火山地山麓面
    - II b 1 火山山麓地斜面
    - II b 2 火山山麓扇状地
  - II c 側火山
  - II d 古富士丘陵
- III 箱根火山地
- IV 丘陵・台地
  - IV a 三国山地南部丘陵地
  - IV b 湯船原台地
- V 低地・台地
  - V a 天子山麓小扇状地群
  - V b 御殿場泥流堆積扇状地
  - V c 鮎沢川谷底低地台地



### 3. 地形分類

#### I 山地

##### Ia 天子山地

富士火山の西麓、朝霧高原の西方に位置する天子山地は毛無山(1945 m)を最高点にして南北にはしる稜線にそって竜ヶ岳、雨ヶ岳、毛無山、長者ヶ岳へとつらなり、山梨県との県境をなしている。稜線部には平坦面もみられ、ほぼ定高性を示す。急傾斜の山腹斜面、深い谷と大きな比高、直線的な斜面などいわゆる壮年期山地の様相を呈する大起伏山地である。稜線付近の傾斜変換線にそって斜面形の発達に関係する山地崩壊の発生もおおく、過去に発生した線状の崩壊地形は水系の発達にかかわっている。また急傾斜の谷底には開析にともなう土石流的作用も推定される堆積地や大きな崩壊地形もみられ、谷底には土砂が堆積して2次の災害の素因ももっている。地質的には新第三系からなり、県境の割石峠から毛無山付近までは富士火山の北をとりまく御坂層の延長であり、中新世中期の西八代層群の南北性の構造に支配されている。また長者ヶ岳付近は同時代の富士川層群の南北性の褶曲構造に支配されるとともに石英閃緑岩体の貫入にともなって隆起して形成された山地ともいわれる。山地を構成する凝灰角礫岩、砂岩、泥岩などの岩石は風化すると崩壊したり、細片化しやすい岩石で土砂の生産と供給が崩壊地の発生や小扇状地群の形成に関係しているともいえる。

##### Ib 三国山地

籠坂峠から東に大洞山、三国山、明神峠、世附峠、不老山への東にのびる山地で稜線は東西方向にのび山梨県と神奈川県との県境となる。丹沢山地からの延長の山地で中新世の御坂層からなり、東端のあたりにはより新しい足柄層が一部分布する。三国山付近には貫入岩体もみられるが南面する斜面は急斜面で谷頭部には崩壊地形もあるが稜線ぞいには平坦面もみられる。籠坂峠から西方の延長は富士火山におおわれて境界は不明となるが、あつい降下碎屑堆積物のためにまるみをもった緩斜面の山形を形成し、アザミ平のような地名もある。南麓は丘陵や台地に移行しその表面には多量の土砂を扇状的に供給した経緯もみられる。

#### II 富士火山地

##### IIa 富士火山地斜面

富士火山体の中央噴火口（直径 500 m 深さ 250 m）を中心して東西にひろがる火山斜面のうち、起伏量、傾斜の比較的大きい地域をまとめて富士火山地斜面として山麓地と区分した。大起伏火山斜面は傾斜 20°以上、中起伏に区分される火山斜面は傾斜 20～8°、小起伏火山斜面は傾斜 15～8°の地域に区分されることが山梨県の調査報告にあるが、静岡県側にもこれにほぼ一致する起伏量と傾斜の関係をもっている。また火山地斜面は表層の構成物質や景観をもとにして、露岩や岩屑からなる急斜面（Ⅱa-1）と火山地斜面に（Ⅱa-2）区分したが、火山地斜面は表面が火山灰などでおおわれており、被植の差ともなっておりあらわれてくる。

構成物質は新富士火山の溶岩と火山碎屑物からなるが、溶岩流はいずれも中央火口より噴出し、流動性の高い玄武岩質溶岩は四方にむかって流出した。溶岩の一枚のあつさは 2 m 以下、幅は数 m から数 10 m といわれ、くりかえし噴出しながら火山を形成した。また上部にあつく下部にうすく積み重なりつつ山頂の高まりが成長した。そして一般に新富士火山溶岩のうち旧期溶岩類は山麓から中腹にかけて 1200 m 以下の地域に分布し、中期溶岩類は 1000～2500 m 付近までの中腹に、新期溶岩類は 2500 m 付近の中腹から山頂にかけて分布する。その間に多量の火山碎屑物も噴出して成層火山の形成がつつげられた。また新しい溶岩が凹地にそって放射状に流下したあとも地質図に表現されており、凹地をうめるような分布を示している例もある。

山頂付近の露岩や岩屑の地域は急斜面で崩壊、崩落がくりかえされるが気温差がはげしいための機械的風化や気温変化による凍結融解などによる脆弱化と破壊がすすみ、岩屑の生産が進行している。また成層火山であるため溶岩間にすき間やギャップもおおく、土壌の生成もみられないために植生にとぼしく裸岩と岩屑からなる急傾斜となっている。下刻による開析谷の谷壁からの崩落、表面移動などにより、岩屑は移動するが、水や雪や氷の作用の具体的営力については不明の点がおおい。

高度の低下、傾斜の変化、気温の上昇などともなっており中腹には被植のある斜面に移行するが、東斜面では火山砂礫が表面をおおい植生の分布を東西で比較すると、東側は裸地が広がる。中腹からは火山地を開析する水系も多くなり、開析谷の形成には降水、雪どけ水、堆積物や表面の微地形などの相互関係が形成されることがおおく、谷もガリー状の形態を示し、下刻や側刻も進行する。

## Ⅱb 富士火山地山麓面

富士火山の山麓は起伏量により山麓地にあたる部分を区分したが東斜面と西斜面とではその性質を異にする。西斜面の山麓は流出した溶岩流が西側の天子山地に接するあたりまでひろがり、朝霧高原の名のとおり高原状の地形が広い裾野に展開している。根原、富士丘、人穴など集落が点在する。この地域は下位より横手沢溶岩流、富士見橋溶岩流、猪の頭溶岩流、朝霧溶岩流、犬すずみ(人穴)溶岩流、菖蒲沼溶岩流、根原溶岩流などに区分され、溶岩流の境界に小崖や段を形成する。溶岩流の重なりあいや溶岩流先端の舌状地形が裾野の微地形となって表現されているといえる。また流動性の差異、新旧関係も原地形に影響をもっている。犬すずみ溶岩流は寄生火山犬すずみ山からの流出である。小さい地形としては若干の逆傾斜、局地的な平坦面、末端の急崖部、閉塞による湿地状の凹地、孤立した小丘などがある。凹地状の部分は溶岩流そのものの表面に生じた凹地もあるが、土壌が集積した畑地になる場合もある。

また西麓には図幅南部に大沢末端の火山山麓扇状地(Ⅱb-2)は地形的特色からひとつの単位とした。富士西斜面に発達し、深い谷を形成しつつある大沢崩れは潤井川水系の谷頭部に位置する崩壊地である。大沢は山頂直下から山麓まで連続する放射谷のひとつであるが崩壊による土砂の生産と供給は下流への影響、火山の開析や解体の問題もふくめて特性ある地形となっている。谷は谷頭部、峡谷部、中流部、岩樋部、扇状地部などに区分され、下流の扇状地部から砂防事業が上流にむかっている。大沢はほぼ3000年前頃に谷の発生がみられ、約1000年前におこった谷頭部の大崩壊のあと土砂の生産と送流が増大したといわれる。扇状地は集中豪雨時や隔雪時の一時的出水による土石流的流出によって成長し、周辺は旧期扇状地、流路にそう地区は新期の扇状地と区分される。扇状地は標高500~900mに位置し、これまでの堆積土砂量は5000~6000万 $m^3$ と推定されている。

火山山麓地は起伏量の計測をもとに50~100mの比高をもつ山麓地Ⅰと50m以下の山麓地Ⅱに区分されるが、地形的に山麓として一括し、その構成物質で区分した。傾斜も一般に5°前後であり、火山地斜面の小起伏地に移行するが、等高線のみとやり構成物質、水系の状況なども加味して区分した。また山麓地は水も湧水や表流水により涵養されるようになり、ガリー状の谷であっても時期的に流水にもめぐまれ、山麓での特色ともなる。とくに東斜面は火山砂礫におおわ

れるが山麓地は御殿場泥流からなる扇状地地形へと移行する。流路にそう古い泥流性の堆積地もあり西麓にくらべて東麓は複雑な地形である。また東麓は演習場のしめる面積が広いが農業的土地利用もすすみ湧水や東富士ダムなどを水源としている。

## IIc 側火山

図幅内の側火山としては、噴石丘をもつ罫塚（1598 m）、多量の溶岩流を流出させた犬すずみ山（1205 m）、須走口新五合の小富士、1707年に活動した宝永山などがふくまれる。県境にある1900 mの標高をもつ小富士は旧期の寄生火山、古富士火山の一部、寄生火山とみとめないなどの扱いはさまざまであるが、山中湖図幅には火山斜面の一部としても扱われている。宝永火山は宝永4年に活動し、富士火山の活動としては最新のものであり、爆裂火口と噴火口にその特色をもち周辺は火山砕屑物でおおわれている。宝永山は第一火口の東側で2702 mの高度を示し赤岩は赤褐色スコリア質降下火砕堆積物からなり、一般傾斜とは逆に北方へ傾斜しているため古富士火山の一部がおしあげられて形成されたとも考えられている。第一火口は長径1300 m、短径1000 mの長円形、第二火口は長径600 m、短径400 mの長円形、第三火口は長径500 m、短径400 mの南へ開いた火口となっていて、火口壁はいずれも急崖をなしている。側火山は一般に平滑な円錐形火山の山腹に変化を与える地形であるが、小規模のものは火山灰や降下砕屑物のため埋没してしまった場合も考えられている。

## II d 古富士丘陵

富士山図幅の南西端に古富士集塊質泥流層からなる丘陵性の台地が分布し、猪之頭から南部にかけての地域、田貫湖周辺の丘陵、大平山もそれにあたり、その周辺は溶岩流が埋積している。富士宮図幅の白糸丘陵にあたる。丘陵は周辺が崖でかこまれたり、傾斜の変化があるために構造線によって分断されたとも推定されているがその過程については不明である。高度と表面にやゝ起伏のある波浪状の地形であるため周囲と区別される。東麓では火山灰の下に埋没してしまうが小山町の湯船原、阿多野原などは台地の基盤をなしている。富士宮図幅の星山丘陵、羽鮒丘陵などは同一の丘陵であるがこれらの丘陵は断層の急崖で境界づけられることもあり、また猪之頭から田貫湖周辺にかけてもその断層の延長が想定されて

いることもある。

### Ⅲ 箱根火山地

“山中湖”“秦野”“小田原”図幅に箱根火山がわずかにふくまれるが鮎沢川がその境界をなしている。金時山から足柄峠にかけての山地で金時山は古期外輪山の最高点 1,213 m の高度をもち、安山岩質噴出物からなる成層火山である。また箱根火山の北西山腹に噴出した岩脈状の性質をもち、急峻な地形は独特な山形を呈する。金時山から足柄山にかけての稜線は神奈川県との県境となるが平坦面がみられ、水系の発達も著しく樹枝状に開析されている。山腹の緩斜面はゴルフ場に改変されて人工改変地の面積も広い。

### Ⅳ 丘陵・台地

三国山地と鮎沢川河谷の間には地形的に丘陵や台地がひろがるが、大御神から上野にいたる山麓部の丘陵地（Ⅳ a）と湯船原、阿多野原などの台地（Ⅳ b）に区分することができる。緩傾斜の丘陵性の山地はあついで降下碎屑堆積物におおわれるが、富士霊園、ゴルフ場、スピードウェイなどの施設に改変され人工改変地となっている。降下堆積物とともに三国山地斜面から流出した土石流的堆積物などによってもおおわれ、流路や谷の末端にそう砂礫台地化している地域、中日向から上野にかけては盆地状の地形が埋積され平坦な水田となっている地域など、局地的にその変化が激しい。須川の上流部は砂礫質の堆積した台地であり、須川はそれを深く下刻するような流路をとるため段丘化している。上野の盆地も山地からの土砂の運搬と堆積により平地が形成されているが、閉塞性の地形で盆地の出口では須川の支流上野川の谷頭浸食や下刻は深い崖を形づくっている。湯船原、阿多野原などの台地は平坦な台地面をもち、基盤は泥流堆積物からなっている。湯船原台地はその東部は湯船層をあつさ 80 m に達する降下碎屑物でおおうが、南部では湯船層の上に平坦な台地面をつくるあついで火山角礫岩層があつて、その上に 30 m あまりの火山灰層がのっている。阿多野原台地は湯船原台地よりややひくくなるが基盤は火山角礫岩層である。そしてその上位に水成とみられる亜円礫層、火山灰質砂粘土層がのるため砂礫台地でもあり、角礫岩層上面は浸食面と考えられている。なお阿多野原台地にもスコリア層などをふくむ降下堆積物もあつて堆積する。

これらの台地や丘陵はその土地利用の差異が地形によって明瞭にあらわれている。山麓緩斜面はレジャー施設等の開発がすすんだが湯船原台地は未開発で残されており、乏水性に由来するであろう。阿多野原台地、上野盆地、大御神台地などは農業的土地利用がすすみ、水の豊かさがうかがえる。水田化にとまなう造成や改変も考えられるが、微地形は水田と畑地の区分、集落の立地条件に影響を与えている。台地を刻む須川の谷壁からの湧水量は多くワサビ田も谷底にみられる。

## V 低・台地

### Va 天子山麓小扇状地群

富士火山の新しい溶岩流からなる朝霧高原と天子山地との接する移行部には小扇状地や崖錐状の堆積平坦面が支谷の溪口部に分布している。根原西方、麓、猪之頭などにみられ、山地と低地との境界はリアス海岸を思わせるような形で谷底に埋積している。扇状地上の流路は下刻したガリー状の地形や、麓南部は巨礫の堆積する涸谷の景観を呈したり地域差はあるが、一般に伏流をなしている。平坦面は牧草地や畑地となるが、湧水や流水にめぐまれると水田化もされている。天子山地の急斜面を開析する谷にそって、土石流的な営力で一時的に運搬され、急激に形成された形跡もある。それは背後の山地や谷には崩壊が現在も進行しており、荒廃溪流であり、土砂の生産と供給が進行していることから豪雨時の土石流や2次的災害の予測もふくめて詳細なチェックが必要である。1966年に西湖北方の根場で発生した御坂層の山地の土石流で扇状地が形成され、集落を埋没した事例もあり、生きている扇状地ともいえる。田貫湖北方の小田貫湿原は溶岩流の上に土砂が流出して流路を閉塞し、湿原化した事例であるが、規模、傾斜、構成物質の地域的特性は多様である。

### Vb 御殿場泥流堆積扇状地

“山中湖”図幅の東南部の水田地帯は御殿場図幅の御殿場扇状地の延長部であり、山麓地の一部であるが扇状地として区分し、低台地の一部とした。この扇状地は約2300年前に発生した砂や礫をまじえた大きな泥流による堆積物からなる扇状地で、富士火山周辺にみられる火山山麓扇状地のひとつであるが、面積が広く、水系が発達して恒常流のある点では他と性質をこととする。泥流は裾野を平坦化しながら鮎沢川の流路に達し、あつい所では50mをこえる堆積物からなり、山

体の爆裂破壊による押し出し流出と考えられている。またこの扇状地を形成している泥流堆積物の基盤にあたるのが古富士泥流堆積物である。扇状地面には平行する水系が下刻をおこない、ある場合はガリー状の様相を呈しているがその水源は湧水である場合が多く、上小林、柴怒田には湧水がみられ川ぞいに水田地帯を形成する。流路は扇状地面を下刻するため河岸には小岸がみられ段丘する場合もあり、起伏にとんでいる。また泥流にとまなう微地形が表面に散見され小丘や小さい凹地となり、土地利用にもその差は表現されるが、それらの成因や分布については検討の余地がある。また湧水地点と地形や堆積物との関係、河川の下刻と流量との関係、水田化にとまなう原地形の改変など、御殿場扇状地をめぐる地形的諸問題はおおく残されている。

### Vc 鮎沢川谷底低地台地

“山中湖”図幅の東南部に流路をもつ鮎沢川にそって小規模な谷底平野や河成段丘が形成される。支流の馬込川や須川にそって上流側に連続性が追跡できる。御殿場扇状地の表流水や谷ぞいの崖からの湧水を集め、流量にはめぐまれ、曲流にとまなう段丘化もみられる。川ぞいの沖積地は水田化されているし、須川にそって谷底低地にはワサビ田が開かれている。小山町の中心集落ののる面や菅沼付近の面はほぼ2段に区分できる。湯船川にそって沖積地と低い段丘がみられ、背後の山地との間には崖錐堆積物が分布する。小山や菅沼の段丘はいずれもあつい火山砂礫層の堆積物からなり、基本的には泥流性の堆積物が鮎沢川にそって流出したものが基盤になっている。生土、藤曲なども下刻によって段丘されているが崖錐性堆積物におおわれる部分もある。段丘面や構成物質による対比は今後の課題であるが、阿多野原台地、御殿場図幅の足柄台地など背後の台地との関係もあり、段丘の基盤が古富士泥流堆積物、御殿場泥流堆積物と火砕堆積物などのいずれに規制されているかの解明も発達史的には必要な問題である。工場立地や市街化により原形が改変されている場合もおおい。







## 5. 道路と河川

### 【道路】

国 道 138号 139号 246号  
 主要地方道 富士宮鳴沢線  
 有料道路 東名高速道路 富士宮有料道路

### 【河川】

水系	第1次支川	第2次支川	河川延長 (m)	支川流域 (Km <sup>2</sup> )	自己流域 (Km <sup>2</sup> )	計 (Km <sup>2</sup> )
富士川	芝 川		22,500	153.06	38.96	192.02
		猪ノ窪川	800		83.38	83.38
		五斗目木川	11,500		46.64	46.64
	潤井川		25,490	185.35	37.85	273.20
鮎沢川			16,750	135.25	48.83	184.08
	野沢川		2,700	6.16	7.10	13.26
		中嶋川	1,700		1.49	1.49
		小山湯船川	1,300		4.67	4.67
	須川		5,500	10.54	26.20	36.74
		上野川	1,600	3.45	7.09	10.54
	馬伏川		6,450	64.35	6.57	70.92
		小山佐野川	4,500		38.90	38.90

## 〈引用、参考文献〉

- 静岡県（1965）富士山および岳南地域の防災上の諸問題
- 静岡県（1973）静岡県地質図及び説明書
- 静岡県（1978）土地分類基本調査“御殿場”
- 静岡県（1979）土地分類基本調査“富士宮”
- 津屋弘達（1968）富士火山地質図及び説明書 地質調査所
- 富士宮市（1988）富士宮市の自然
- 町田 洋（1964）Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の  
発達史 地学雑 73 293-308、337-350
- 町田洋他（1975）富士山東麓駿河小山付近の第四系 第四記研究 14 77-89
- 町田 洋（1977）火山灰は語る 蒼樹書房
- 山梨県（1980）土地分類基本調査“富士山”
- 山梨県（1982）土地分類基本調査“山中湖・秦野”

## 付記

“富士山”“山中湖”図幅については、さきに山梨県で土地分類調査が実施されており、その成果は今回の調査で参考にさせて頂いた。そして富士山を中心とした地域については、県境をこえて富士火山の地形分類を図示したいとの願いもあった。そこで表層地質図、地形分類図については山梨県の実績をえて、山梨県側の成果の一部を富士山の連続性を示すために印刷にすることとなった。地形分類図については富士火山地のうち、大起伏火山地、中起伏火山地、小起伏火山地、火山山麓地Ⅰ、火山山麓地Ⅱ について既成の山梨県の地形分類図から引用させて頂き、静岡県の地形分類図に着色して富士火山地を示した。このことについて理解をもって了承された山梨県の地形調査を担当された東京都立大学（調査当時山梨大学）の平川一臣先生にお礼申しあげ、謝意を表する次第である。

（北川光雄）

## Ⅱ 表層地質図

### 総論

本図幅の静岡県部分は富士山の南部と東西両側の基盤新第三紀山地を含むが、富士山については山頂を通る南側の一部を示すにすぎない。そのため、図幅では富士山体の北半部を山梨県の表層地質図（富士山、1980：山中湖・秦野、1982）を引用して富士山概略を示した。

富士山は山頂（3776 m）とその火口、宝永火口の一部および大沢崩れなどが示される。富士山西方には毛無山（1945 m）を中心とする新第三紀の御坂層群、長者ヶ岳（1355 m）を中心とする天子層群を基盤に古富士火山噴出物が山麓に分布する。古富士火山噴出物は南隣富士宮図幅からの延長で断層のために周囲の富士山溶岩より高い地塊として露出する。富士山東方には同じく新第三紀の御坂層群が三国山（1320 m）を中心に分布し、それらの南東側に足柄山地の一部が露出する。麓に中段段丘堆積物である駿河礫層、より上位の古富士火山噴出物が富士山の火山灰層などにおおわれて鮎沢川河岸に狭く露出する。扇状地堆積物、低位段丘、沖積平野は大沢扇状地を除いて分布は狭い。

### 各論

未固結堆積物： 砂礫質沖積層は鮎沢川河床、猪之頭周辺に狭く分布する。泥砂質沖積層は根原西南方の湿原表層部にのみ分布する。低位段丘堆積物は砂礫質で鮎沢川河岸に、中段段丘堆積物（駿河礫層）は砂礫質で駿河小山北方の御坂山地山麓にまとまって分布する。扇状地堆積物は三国山御坂山地の南麓、毛無山御坂山地と長者ヶ岳天子山地の東麓に分布する。いずれも河川成堆積物であるが、その源流部や周辺の地質に由来する火山岩礫が多い。大沢扇状地は富士山大沢崩れの下流側山麓にひろがるが、これは火山扇状地として区分した。

富士火山噴出物のうち火山灰など火山噴出物は山体西側中腹までと山体東側全域をひろくおおう。寄生火山噴石丘は半固結ともいえるが、溶岩とは区別した。寄生火山は山体の北西-南東側に多く、本図幅内には少ない。宝永山赤岩は古富士火山の一部が噴火によって押し上げられたものとされる。

火山岩・凝灰岩類： 富士火山噴出物のうち本体玄武岩溶岩及び寄生火山溶岩は大部分は固結岩類であるが、間にはさまった火山灰あるいは急冷のため破砕さ

れた部分は未固結といってよい場合もある。本体玄武岩溶岩流は流下範囲と流下時期によって数多くにわけられるが、本図幅では一括した。寄生火山溶岩の主なものとして西麓の旧期寄生火山犬すずみ山の溶岩がある。古富士火山噴出物は主として凝灰角礫岩及び泥流からなり、固結岩類と考えてよい。箱根火山外輪山溶岩は安山岩溶岩で秦野・小田原図幅にその一部が分布する。

固結岩類：富士山西側の天子山をつくる新第三紀天子層群は主として砂岩礫岩からなり、上部では泥岩と互層する。向斜構造の軸にあたる山頂部には安山岩質凝灰角礫岩が露出する。地質年代は鮮新世と考えられる。富士山東側には秦野図幅中に同じく新第三紀足柄層群の一部が分布する。これも主として礫岩・砂岩からなり、泥岩をはさむ。構造は複雑であるが地質年代は鮮新世から更新世にわたると考えられる。

富士山西側と東側に新第三紀の御坂層群がわかれて分布する。これは主として安山岩質火山岩および緑色凝灰岩からなる。本層は富士山の下に基盤として広く分布すると思われる。三国山地では石英閃緑岩に貫入される。地質構造は複雑に変化に富むが、全体として東西性の構造を示す。

### 〈主な文献〉

- 浜野一彦ほか（1980）土地分類基本調査 表層地質図 “富士山”  
1：50,000、山梨県
- 浜野一彦ほか（1980）土地分類基本調査 表層地質図 “山中湖・秦野”  
1：50,000、山梨県
- 町田 洋 （1964）Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の  
発達史、地学雑誌 73、p. 293-308：337-350.
- 土 隆一 （1986）静岡県地質図 1：200,000、静岡県
- 津屋弘達 （1971）富士山の地形・地質、付地質図 1：50,000、富士山、  
富士山総合学術調査報告書、p. 1-149.

（土 隆一）

# Ⅲ 土 壤 図

## 1. 岩 石 地

土壌層がなく、基岩が露出している。本図幅では富士山頂周辺及び毛無山地東斜面に分布している。

## 2. 高山性岩屑性土壌

主として森林限界周辺及びそれ以上の山腹斜面に分布する(A)C断面をもつ土壌で、(A)層の発達著しく弱くかつ浅い。これに属する土壌統は富士山1統で、富士山腹の2,300 m以上の高海拔地帯にみられる。

## 3. 粗粒残積性未熟土壌

多少にかかわらず浸蝕の影響がみられる(A)C断面をもつ土壌である。腐植の浸潤が少なく、わずかに暗色を呈する(A)層は発達弱く、かつ浅い。これに属する土壌統は上井出統(I<sub>m</sub>-C)で図幅中部の大沢扇状地に分布し、原野もしくは天然広葉樹林を形成している。

## 4. 火山拋出物未熟土壌

火山爆発にともない山体の一部が破壊されて生じた岩屑および火山砂礫、火山灰がそのまま堆積したか、また雨水、河川水などと混じって流動して堆積した物を材料とした(A)C断面をもつ土壌である。(A)層は発達弱くかつ浅い。

これに属する湯船1統は小山町湯船原の東部に分布し、表層は直径8 mm程度の亜角礫を50%程度含み、下層には10 cmの層厚をもつ固結層が存在する。

## 5. 粗粒火山拋出物未熟土壌

火山爆発にともない山体の一部が破壊されて生じた岩屑および火山砂礫、火山灰がそのまま堆積したか、また雨水、河川水などと混じって流動して堆積した物を材料とした(A)C断面をもつ粒径の粗い土壌である。(A)層は発達弱くかつ浅い。これに属する土壌統は農地土壌では湯船2統、林地土壌では富士山2統、富士山3統および滝ヶ原統である。富士山2統及び富士山3統は富士宮図幅の土壌名、また滝ヶ原統は御殿場図幅の土壌名を踏襲した。湯船2統は小山町湯船原の

平坦な地形面に分布し、宝永砂を多く含む砂質の土壤であるが、部分的には壤質の土壤で表層が覆われている。畑地として利用されている。富士宮2統は高海拔地帯(2,000 m以上)にあって、堆積腐植がH層もしくはH-A層を形成するが、肉眼ではポドゾル化はみられない土壤で、主として天然針葉樹林を形成している。富士山3統は富士山2統の分布域にあって、下層にマルビ溶岩を介在する土壤で1/20万の土壤図では岩石地となっているが、A層の発達状態から本土壌群に包含した。天然広葉樹もしくは天然針葉樹林を形成している。

## 6. 人工未熟土壤

小起伏のある溶岩原を農地造成によって均平化して大規模圃場化した農地にみられる土壤である。これに属する朝霧1統は大略20 cm以下の厚さの黒褐色の黒ボク質表層(溶岩塊、褐色土塊を含むことがある)と下層の溶岩塊からなる半角礫層を主要構成土層とする土壤である。主に富士宮市朝霧地区に分布し、牧草畑として利用されている。

## 7. 厚層黒ボク土壤

土色の明度、彩度とも2またはそれ以下の黒色ないし黒褐色の腐植に富む表土層(黒ボク層)が50 cm以上の厚さをもつ土壤である。これに属する朝霧2統は細粒質で厚い黒褐~黒色表層(スコリヤを含む~富むことがある)と細粒質で暗褐~褐色のB層(スコリヤを含むことがある)からなり、表層が1 mを越える場合がある。富士宮市朝霧および人穴地区の溶岩原の地形的凹部に分布し主に牧草畑に利用されている。上野統は全層に亜角礫を多く含み、下層に固結層が存在する。小山町北部に分布し、畑として利用されている。

佐折3統は林地土壤で、富士宮図幅同様、西富士山麓の古富士火山噴出物の風化層上に分布するが、富士宮図幅のものより層厚はやゝ浅い。主としてヒノキ人工林として利用されている。

## 8. 黒ボク土壤

土色の明度、彩度とも2またはそれ以下の黒色ないし黒褐色の腐植に富む表土(黒ボク層)の厚さが25 cm以上50 cm未満のもので、その下位には褐色のB層が存在する。これに属する花島統は黒色で壤質の表土層と褐色ローム層の下

層からなり、50 cm 以下は古富士泥流である。田貫湖東部の原野に分布している。人穴統は大沢スコリアが風化により赤褐色化した粒子に富む、黒褐色の堅密な盤層（エカスマサ）が50 cm 以浅に出現する土壌である。この上位には細粒質、黒褐～黒色の黒ボク質表層がある。また、下位には未風化で粗しような粗砂～細レキ状のスコリア層（大沢スコリア）のくることが多く、さらにその下は細粒・粘質な土層（軟質ローム層に類似）となる。富士宮市人穴から猪之頭地区に分布し、主として牧草地として利用されている。朝霧地区でも未造成地に残存する。上小林統は下層部が礫質で、さらにその下部に固結層（マサ）が認められる土壌である。御殿場市北部の緩斜面に分布し、主に畑として利用されている。

林野土壌では北山1統、北山2統、北山3統、佐折2統、箱根1統、箱根2統、中畑3統、富士丘1統、猪之頭1統、根原1統および柳島1統がみられる。このうち、北山1統、北山2統、北山3統および佐折2統は富士宮図幅、また箱根1統、箱根2統および中畑3統は御殿場図幅の土壌名を踏襲した。北山2統、北山3統は大淵スコリアの分布域の西側緩斜面に分布し、大沢ラピリを介在する土壌である。北山2統はラピリの層厚が50 cm 以上有する土壌である。北山3統は2統と同様な層厚を有するが、扇状地堆積物層の土壌で、ともにヒノキ人工林として利用されている。北山1統は北山2統の分布域にみられるが下層に大沢ラピリを介在することが、緩凸斜面のため乾性の土壌構造を有することなどのちがいがあがる。標高が高いことから、主として、ヒノキ、モミ人工林として利用されている。佐折2統は天子・毛無山地の山腹斜面および古富士火山噴出物上に分布する適潤型の土壌で、スギ、ヒノキ人工林として利用されている。富士丘1統は朝霧から根原にかけての平坦面と富士山西側緩斜面に分布し、下層に赤褐色のスコリアを混在する土壌で、ヒノキ人工林として利用されている。猪之頭1統は天子・毛無山地の緩凸尾根すじに分布する黒ボク層のやゝ浅い土壌で、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。根原1統は根原地区の扇状地にあつて、その緩凹斜面に分布し、火山灰の再堆積層に火山性の大礫を混在する土壌で、主として天然広葉樹林として利用されている。柳島1統は三国山地の緩凸斜面に分布し、下層に火山砂礫層を介在する土壌で、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。箱根1統は箱根山地の尾根すじに分布する乾性型で、黒ボク層の上部が退色した土壌である。また、箱根2統は1統の下斜面に分布する適潤型の土壌である。両統とも箱根山地に広く分布し、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林



として利用されている。中畑3統はA層下部からC層上部にかけて砂礫に頗る富んだ土壌で、御殿場市および小山町の緩斜面に分布し、ヒノキ人工林または天然広葉樹林として利用されている。

## 9. 多湿黒ボク土壌

これは黒～黒褐色を呈する腐植質表土層（黒ボクのA層）の厚さが25 cm以上で、表土層とその直下の下層土層に鉄斑紋の存在がみられるものである。これに属する古沢統は糸状、膜状斑を持ち、全層が腐植に富み、下層に亜角礫を多く含む土壌である。富士山麓の緩斜面に分布し、水田として利用されている。

## 10. 乾性褐色森林土壌

湿润温帯の森林下に発達し、A、(B)、C層位をもち、主として森林植物の落葉、落枝やその分解過程のものが地表にやゝ厚く堆積し、暗褐色ないし黒褐色のA層と7.5 YRもしくは10 YRの色相をもつ明度、彩度の高いB層を有する土壌である。一般に粗しょうで、乾燥破砕によって形成された乾性な土壌構造が発達するなどの形態の特徴をそなえている。これに属する土壌統は富士山8統、上稲子3統、丸岳1統および柳島2統で、富士山8統および上稲子3統は富士宮図幅、又、丸岳1統は御殿場図幅の土壌名を踏襲した。富士山8統は富士山南西の緩凸斜面に分布し、やゝ黒みの強い黒褐色のA層とスコリヤを多量に含むB層を有し、海拔1,500 m以下では主としてヒノキ、モミ人工林、1,500 m以上では針広混交林として利用されている。上稲子3統は新第三紀堆積岩を母岩とする天子山地の尾根すじに分布し、ヒノキ人工林として利用されている。丸岳1統は金時山の西および北西斜面の尾根すじに分布し、ヒノキ人工林または天然広葉樹林として利用されている。柳島2統は三国山地の急凸な尾根すじにあって、第三紀凝灰岩類を母岩とし、火山砂礫に富む土壌である。その分布域は狭く、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。

## 11. 褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌と同様の森林帯にあるが、斜面下部や広い緩斜面など、常に地中水分に富む環境下に現れる。黒褐色ないし暗褐色の膨軟なA層が発達し、その下部にある褐色ないし暗褐色のB層に漸変している土壌である。これに属する土壌統は上稲子5統、柳島3統、富士山9統、富士丘2統、須走統、湯船3統お

び丸岳2統である。このうち、上稲子5統および富士山9統は富士宮図幅、また丸岳2統は御殿場図幅の土壤名を踏襲した。富士山9統は富士山南西緩斜面にあって、富士山8統同様、やゝ黒みの強い暗褐色のA層と褐色ないしはにぶい褐色を呈するBC層に多量のスコリヤを含有する土壤で、海拔高の低いところでは（およそ1,500m以下）ではヒノキ、モミ人工林、高海拔地帯（1,500m以上）では天然針葉樹林として利用されている。上稲子5統は天子山地の斜面に分布し、やゝ腐植含量の乏しいA層と褐色のB層に漸変する土壤で、主としてスギもしくはヒノキ人工林として利用されている。丸岳2統は箱根山地のうち、丸岳周辺に広く分布するが、本図幅内では金時山以北の山腹斜面や沢すじにみとめられ、主にヒノキ人工林として利用されている。富士丘2統は富士山麓西斜面の山梨県境付近に分布し、薄いF層と火山礫からなる礫層を有する土壤で、天然広葉樹林として利用されている。須走統は籓坂峠（凸凹山付近から大洞山付近にかけて）に分布し、薄いF層と火山礫に頗る富む土壤で天然広葉樹林、カラマツ・ヒノキ人工林等に利用されている。湯船3統は小山町湯船原の南側を流れる須川の両岸にあって、台地への急斜面に帯状に分布する火山砂礫に富む土壤で、主としてスギ人工林として利用されている。柳島3統は三国山地にあって、沢すじの急斜面に分布し、第三紀凝灰岩類を母岩とし上部に厚い火山砂礫を被覆する土壤で、スギもしくはヒノキ人工林として利用されている。

## 12. 褐色低地土壤

本地域の褐色低地土壤は比較的発達が進まぬA層の下に黄褐色～黒褐色のB層を持ち土性が中粒～細粒質の土壤である。主に朝霧高原西側山麓の扇状地、谷底低地や河川流域に分布し、面積は狭い。これに属する猪之頭2統は火山灰物質が芝川によって運搬再堆積された物を母材とし、黒褐色中粒質の厚い（50～60cm）表層土と暗褐色中粒質の下層土層からなり、有効土層は深い。水田あるいは畑として利用されている。根原2統は暗褐色の表土層とオリーブ褐色の厚い下層土層からなり、火山灰土層が扇状地に再堆積したものである。普通畑として利用されている。猪之頭3統は黒褐色壤質の表土層と黄褐色粘質の下層土層からなり、火山灰物質が再堆積したものである。50cm付近から礫層が出現する。畑として利用されている。麓統は黒褐色壇壤土質の表層に半角礫を含み、25cm付近に礫層が出現する。普通畑として利用されている。広見統は中粒質、黒褐～黒色の表層

(しばしば礫を含む)の下50 cm 以浅に砂層や砂礫層の固結した岩盤(ジャリマサ)の頂頭部が出現するのが特徴である。富士宮市広見地区の扇状地礫層上に分布し、主に牧草地として利用されている。

### 13. 灰色低地土壤

土性が中粒質で土壤断面の色相は灰色を呈し、斑紋の存在がみられ、地表下80 cm 以内にグライ層の出現がみられない土壤である。これに属する土壤統のうち、柳島4統は鉄およびマンガンの斑紋が認められ、層位分化が進んでいる土壤である。小山町湯船、柳島、中島の小河川の河岸段丘に分布し、主に水田として利用されている。下原統は表層部に黄褐斑がみられ、グライ斑をともなうことがある。小山町吉久保の小河川の河岸段丘上に分布し、水田として利用されている。奈良橋統は表層にグライ斑が下層は砂質で小礫に富む土壤である。小山町須川の谷底低地に分布し、水田として利用されている。

(石田隆、中島二夫、加藤芳朗、浜田竜之介、森 充、縣富美夫)

## Ⅳ 傾斜区分図

地形図の等高線の集まり具合から傾斜を7階段に区分して図幅の傾斜区分図とした。またそれに標高区分を切峰面的に表現した100 mごとの等高線で示し傾斜区分に重ねた。富士山頂を中心とする地域は山頂の急傾斜地から山麓の緩斜面まで噴火口を中心とするほぼ同心円状のコンターの配列を示すため、傾斜区分もそれにそって同心円状に急傾斜地から緩傾斜に移行している。また山腹斜面には山体を雨裂状に下刻するガリー状の谷が最大傾斜線にそうように発達し、小さい崖を形成するが、地形分類図ではその谷を表示し、局地的に変化のあることを示した。また水系がある幅をもって山体を解体している場合には急傾斜が線状に分布する場合もみられる。富士山の場合は標高の高い所が急傾斜、低い所が緩傾斜であるが、非火山性の山地の場合は開析がすすんでS7、S6が広く分布し、谷頭部や谷壁にそって急傾斜の部分がひろがり、山頂付近の傾斜変換線にそっては一般的なことであるが崩壊が発生しやすい。三国山地、天子山地などにその例がみられる。台地や段丘の周辺の崖、山麓における下刻のはげしい水系の谷壁や崖などの表示により地形的特性に結びつけることができるが、小規模の場合には消されてしまう場合も多い。したがって表示がなくても谷にそう両谷壁の急崖の場合や傾斜の変化のはげしい場合は多い。火山の裾野の傾斜の区分による地域区分が地形的特性や自然的特性とどのように結びつけられるのか、構成物質や地形発達との関係などについては今後検討したい。標高区分図として示した100 mごとの等高線は浸食作用をうける前の原地形に近いものを示すこともあり、もとの地形の傾斜の分布を等高線からよみとることもできる。

(北川光雄)

## V 水系・谷密度図

水系図は5万分の1地形図、2万5千分の1地形図、空中写真などをもとにして谷を求めたもので、おもに、地形図の等高線のまがりかたから谷の形の表現されているものを抽出した。富士火山の斜面を新しく開析する谷は平面的には連続性に乏しく、形態的にはガリー状に発達するものをのぞくと地形図の表現も不十分な谷形で、十分に水系を形成するに至っていない。溶岩流地では表面をおおう溶岩流の上の起伏にそって形成された水系もあり、火山砕屑物のあついで斜面では降水は滲透するために流水による水系の発達是不十分である。一般的には放射状に直線的に最大傾斜線にそってのびのび凹地の追跡が水系を求めるとなったが、分岐する支谷はかぎられていて水系網の形成は不十分である。山麓地についてみても鮎沢川水系は比較的流量にめぐまれて水系にそう谷地形が形成されるが、裾野の緩斜面上を平行する直線的なパターンを示す。芝川水系についても溶岩流上の凹地や異種溶岩流の間の凹地にそって平行して流下し流域界が求めにくい。水源は湧水に依存する例がおおいが、滲透量がおおいその流水のない潤谷の部分も多くなる。三国山地や天子山地では山腹斜面を開析して樹枝状の水系が発達してはっきりした差を示しているし連続性はあきらかである。火山地の谷は途中で消滅したり、末無川となる場合もあり、表流水と伏流水など流況についても調べる必要がある。

水系図をもとにした谷密度は、地形図を縦横40等分したメッシュの四辺をきる谷の数を4メッシュごとに合計した値であり、水系の発達の度合を示すが、新第三系の山地は浸食の進行したことがその値から判読できる。火山斜面の値は小さくなるがまだ原面の残っていること、滲透がはげしく水系の発達のおくれていることが相対的に考えられる。

(北川光雄)

## VI 土地利用現況図

### 1. 農 地

富士山図幅中の農地としての土地利用は、富士山西麓部の朝霧高原を中心とした地域の牧草畑が主であり、水田は、当図幅の西側山麓部の扇状地、谷底低地及び芝川流域に分布しているが面積は狭い。普通畑は、根原、麓、猪之頭の扇状地や谷底低地に分布しているが、面積は狭く、自給野菜の生産が主である。

山中湖図幅の農地としての土地利用は、鮎沢側、須川、佐野川、馬伏川流域における水田が主である。一部には、豊富な湧水を利用し、ワサビが栽培されている。普通畑は、湯船原、上野、上小川の平坦部及び緩斜面に分布しており、準高冷地野菜が栽培されている。

(中島二夫、石田隆)

### 2. 林 地

本地域に含まれる林地は富士山の裾野部分に当たり、概ね1,000 m以上の標高を有する国有林地帯と1,000 m以下の民有林地帯に分けられる。国有林地帯は1,200 m附近までは、スギ、ヒノキ、カラマツを中心とした人工林化が進んでいるが、これ以上は、ブナを中心にミズナラなど落葉広葉樹が分布している。さらに1,800 m以上になると、コメツガ、トウヒなど天然の針葉樹林が支配している。

一方、民有林の人工林の樹種をみると、ヒノキの占める割合が高く、“富士ヒノキ”の生産地を形成中である。民有林の所有形態をみると、公有林は12%に及び、その他大部分は私有林である。また本地域の林地には、山岳地域の特色のある地形、天然林などが構成する、すぐれた風景、貴重な動植物の存在、国土保全の必要性などから各種の地域指定がなされている。国立公園では国民休養の場として富士箱根伊豆国立公園に、またブナ、ミズナラなどすぐれた天然林と野生鳥獣が生息する貴重な自然環境を構成しており、県指定の明神峠自然環境保全地域に指定されている。次に保安林の指定状況をみると、富士山地域では、国有林を中心に水源かん養保安林に、また小山町北部（不老山、明神峠）地域では、水源かん養保安林及び土砂流出防備保安林に指定されている。

(臼井二十春)

関係市町村の森林概況（図幅外の面積も含む）は、次のとおりである。

### 森 林 概 況

市町村	林野面積	林野率	民 有 林				国有林
			総 数	人工林	天然林 その他	人工林率	
	ha	%	ha	ha	ha	%	ha
御殿場市	12,535	63	8,498	4,085	4,413	48.1	4,037
小山町	9,369	70	6,272	3,312	2,960	52.8	3,097
富士宮市	20,405	65	13,411	10,206	3,205	76.1	6,994
三島市	2,601	42	2,598	1,774	824	68.3	3
裾野市	9,753	71	7,598	5,301	2,293	69.8	2,159
函南町	3,686	56	3,686	2,021	1,665	54.8	—

（備 考）

1. 各市町村の面積は図幅外も含む。
2. 資料は「静岡県林業統計要覧」による。